

# 田心い出の ちから

7

## 「じみ」では捨てられず 心の重荷軽減

のは気が引ける。「そんな思いに応えているんです」



着古したスーツがハンガーにかかっている。額入りのジグソーパズル、釣りざわに布団、食器にぬいぐるみ。うずたかく積まれた品々に、さまざまな暮らしの面影が宿る。

東京都大田区の「キーパーズ」東京支店で、2か月に一度行われる遺品の合同供養。2002年設立の同社は、家族からの依頼で、遺品の整理、処分をする。供養は、依頼者が希望する場合に行うサービスだ。遺品を並べ、僧侶を招いて読経してもらい、社員が手を合わせる。その模様を写真で依頼者に報告する。

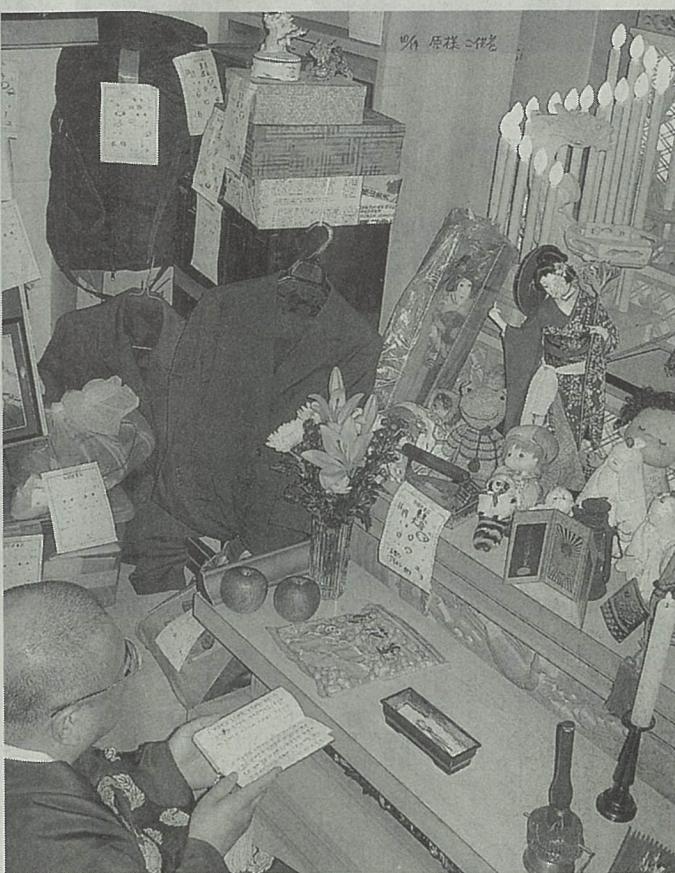
東京都の女性(62)は、昨年5月に一人暮らしの母を亡くした。残ったのは、家いっぽいの家財道具。「家族だけでは、思い出に浸ってしまい、片付けられない」と同社に整理を依頼し、茶わんやはしなじは供養してもらった。「母が大事に使っていたものを、廃棄物になくなかった。供養の写真を見て、気持ちの整理もつきました」

社長の吉田太一さん(43)によると、同社が提供するのは「便利さプラス精神的な重荷の軽減」。遺族にも日々の暮らしがある。寂しいけれど、手際よく始末しなくてはならない。とはいえたが、捨てる

供養とは、もともと仏教用語で仏や僧、死者の靈などに供物すること。人形や針など、役目を終えたものに感謝する意味合いでも使われる。

縄文文化に詳しい伊達市噴火湾文化研究所(北海道伊達市)所長の大島直行さん(57)によると、仏教伝来前の縄文時代の遺跡にも、石皿など調理用具を供養した跡があるといふ。

「帰すことで新たなものを得る循環の思想があったようだ。役目を終えたものをあの世へ送るアイヌ民族の儀式



スーツ、人形、写真——捨てられない思い出が所狭しと並び、供養を受ける(東京都大田区のキーパーズ東京支店で) 大森由紀撮影

『物送り』にも、その思想が受け継がれているのでは」と大島さんは話す。

研究機関「シィ・ティー・アイ(CDI)」(京都市上京区)主任研究員の加藤ゆう子さん(37)は、「モノ供養」について調べている。カメラや携帯電話、つま入れ歯ゲーム機「たまごっち」――。感謝祭など呼び名は様々だが、寺社や業界団体などが中心になって行っている。「高度成長期以降、生活財の増加と連動して、供養も増えているのです」

CDIでは、家庭にあるものの数や品目を調べる生活財調査を行っている。1970年代の平均的な家庭の保有品目数は821。80年代には1219、90年代は1643とものは増えても、住環境が広くなつたわけではない。

思い出がこもるものでも、あふれ過ぎては生活が立ち行かない。だが、じみにするには抵抗感がある。特に、つえや眼鏡などは自らの分身のようなもの。日本では、「お父さんのほし」と「属人的」な使われ方をする道具も多い。「供養は、自ら決めた『終わり』を正当化する儀式なのです」と加藤さんは言う。

現代の供養には、ドライになりきれない日本人の姿が透けて見える。